

## 座長のことば

## 本学における MRSA 感染症の現状

吉澤 定子<sup>1)</sup> 草地 信也<sup>2)</sup><sup>1)</sup>東邦大学医療センター大森病院感染管理部講師<sup>2)</sup>東邦大学医学部外科学講座一般・消化器外科学分野教授

1961年に英国で初めてメチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*: MRSA) が報告されて以降、半世紀が経過した。1970年代以降世界各国で MRSA 感染の増加がみられ深刻な問題となったが、1990年代以降欧米諸国では積極的監視培養に基づく感染対策の強化などが実践され、近年では感染率の減少が認められている。本邦の現状としては、厚生労働省院内感染対策サーベイランス事業 (Japan Nosocomial Infections Surveillance: JANIS) の報告によると全提出検体数における MRSA 検出率は2007年10.4%、2008年10.4%、2009年9.8%、2010年9.1%とやや減少傾向にあるものの、MRSA 感染症は耐性菌による感染症のうち最も頻度が高く (MRSA 感染症13178名/全耐性菌感染症14784名: 89.1%)、依然として種々の対策が必要な状況である。ある報告では、MRSA 非感染例では平均在院日数は14日程度であるのに対し、感染例では88日に延長するとされ、国民衛生の動向から算出した MRSA 感染症において余分にかかる診療費は本邦では年間約2360億円と見積もられており、医療経済的にも依然として課題の大きい疾患の一つである。

黄色ブドウ球菌は、表皮や鼻腔をはじめとし、さまざまな身体部位から検出されるが、多剤耐性である MRSA は従来主に院内感染で問題となり、免疫能が低下している患者に皮膚軟部組織感染症から血流感染・人工物関連感染・周術期感染など幅広い感染症を引き起こす。しかしながら、皮膚や気道に常在しているのみの場合もあり、感染症と常在の判別が困難な場合も散見され、診断には注意が必要である。一方、10年ほど前より、市中型 MRSA (community-associated MRSA: CA-MRSA) といった入院歴等の院内関連の危険因子を持たない小児や健常人に主に皮膚・軟部組織感染症 (skin and soft tissue infections: SSTI) を起こし、ときに致死感染を起こす場合が散見されるようになってきた。CA-MRSA の本邦の状況は十分明らかではな

く、基礎的および臨床的検討は急務であると思われる。

このような現状の中、今回のシンポジウムでは、東邦大学医学部微生物・感染症学講座の嵯峨知生先生に「基礎医学の立場から：大森病院の現状・特徴を探る」といった題名で、大森病院において臨床分離された MRSA 菌株の検討結果も交え、世界の CA-MRSA の現況について概説していただいた。米国では2002年頃から分離されるようになった病原性の比較的強い USA300 株が健常人から臨床分離され、同株によるアウトブレイクも多く発生しており、米国以外の世界各地での検出報告もみられていることからその広がりが懸念されている。当院における CA-MRSA の現状を調査するために、2008年の1年間に大森病院の外来患者の皮膚・軟部組織検体から臨床分離された全 MRSA 菌株 (計57株) を検討した結果では、USA300 株の特徴を有する株は1株検出されたのみであった。その他の CA-MRSA と推測される菌株は基本的に多クローン性であり、しかもその遺伝的背景は世界の他の地域とは異なることが明らかとなった。このような知見は、本邦においても大変貴重な検討結果であると思われる。一方、東邦大学医療センター大森病院呼吸器内科の佐野 剛先生からは、当院における MRSA 肺炎100例に関する検討が発表された。MRSA は気道に常在することもあることから、MRSA 肺炎の診断はしばしば熟練を要す。呼吸器内科医の視点から MRSA 肺炎と確定診断された症例の背景や予後に関する検討は、大変貴重で興味深いものであった。東邦大学医療センター大橋病院の渡邊 学先生からは、大橋病院消化器外科における24年間の MRSA 対策に関して報告された。近年、MRSA の積極的監視培養により MRSA 感染例を早期に発見し、感染対策を行うことで感染率が減少したといった報告が散見されている。大橋病院消化器外科では、長期的な MRSA 対策の結果、スクリーニング培養を行う以前に MRSA 感染ハイリスク症例に対し積極的に感染対策を行うことが有効であると判明し、顕著な

MRSA 感染数の減少が認められていた。このような試みは東邦大学における斬新な取り組みとして他に誇れるものと思われた。

以上、3つの視点から MRSA に関して報告していただ

いたが、熱心な取り組みおよび検討のもと、集学的で質の高い本学独特の知見が得られ、大変有意義なシンポジウムであった。発表していただいた先生方のますますのご活躍を祈念し、深謝致します。